



要旨

J・K・ローリングの『ハリー・ポッター』シリーズと小野不由美の『十二国記』シリーズにおける主人公像の共通点と差異

高橋 優佳

本論文では、J・K・ローリング (1965-) の『ハリー・ポッター』シリーズ (1997-2007) の主人公ハリー・ポッターと、小野不由美 (1960-) の『十二国記』シリーズ (1991-) の主要人物である泰麒 (高里要) について比較しながら共通点と差異を見出していく。ハリーと泰麒には、身体的特徴や背負う宿命に類似点が見受けられるが、現段階で『ハリー・ポッター』シリーズと『十二国記』シリーズの類似性に関して論じている先行研究が非常に少ない。その理由として、2人の主人公の描写に、様々な共通点をも覆すような決定的な差異が存在することが考えられる。本論文における考察は、両作品が影響を受けている、C・S・ルイスの『ナルニア国物語』などの古典作品について、イギリスと日本の作家がそれぞれの地域や文化の中でどのようにして受容し変容させていったか、ということについて考察するための具体例を提供することにもつながるだろう。

Abstract

An Essay on the Similarities and Differences between J.K. Rowling's *Harry Potter* Series and Fuyumi Ono's *The Twelve Kingdoms* Series

Yūka TAKAHASHI

This essay focuses on the similarities and differences between Harry Potter, the hero of J.K. Rowling (1965-)’s *Harry Potter* series (1997-2007), and Taiki (Kaname Takasato), the main character of Fuyumi Ono (1960-)’s *The Twelve Kingdoms* series (1991-). These two characters have some salient features in common, for example their appearance and the fate bestowed on them at their birth. However, there are few previous studies about the resemblance between *Harry Potter* and *The Twelve Kingdoms*. The reason for this may be that there are some crucial differences and these discrepancies could disprove their similarities. Since both works were influenced by C.S. Lewis’s *The Chronicles of Narnia* and other classical works, a comparative study may provide a concrete example of how the reception and transformation of fantasy classics by British and Japanese authors differed depending on their regional and cultural background.

J・K・ローリングの『ハリー・ポッター』シリーズと 小野不由美の『十二国記』シリーズにおける 主人公像の共通点と差異

高橋 優佳

1. はじめに

本論では、2016年時点で73カ国の言語に翻訳され、シリーズ世界累計発行部数は4億5000万部以上を記録し¹史上最も売れたシリーズ作品となった、J・K・ローリング(J.K. Rowling, 1965-)の『ハリー・ポッター』シリーズ(*Harry Potter*, 1997-2007)と、2012年時点で累計780万部を突破した²、小野不由美(1960-)の『十二国記』シリーズ(1991-)について、『ハリー・ポッター』シリーズの主人公であるハリー・ポッターと、『十二国記』シリーズの中でも『魔性の子』(1991)、『風の海迷宮の岸』(1993)における主要人物である泰麒(高里要)の2人について比較しながら共通項と差異を見出していくことを主眼とする。

このような比較を行う理由は、これらのシリーズを類似した作品であるとして論じている先行研究が非常に少ないことにあり、またそれはある重要なことを示唆していると考えられるからである。実際、これら2作品が並べて論じられている先行研究としては、高橋準の『ファンタジーとジェンダー』(2004)が見受けられる程度である。しかし、高橋の著作では、ハリーと泰麒はどちらも己の居場所を別世界で探し求める者の例として挙げられているが³、2人の身体的特徴や、生まれながらにして背負う宿命等の類似性に関しては述べられていない。これはある意味で注目すべき点である。高橋の指摘する共通点の他に挙げられるハリーと泰麒の類似点に関しては後述するが、2人の主人公像には共通点が多い。つまり、これらのシリーズを並べて論じる先行研究がもっとあってしかるべきなのである。しかしながら、実際には前述のように、そのような先行論は少ない。その理由として、2つの作品には、物語の展開や描写、中でも2人の主人公の「成長」や「家庭」の描かれ方に、様々な共通点をも覆すような決定的な差異が存在することが考えられる。

これらのことに関する指摘や考察を通して、これら2つの作品が影響を受けてい

るであろう、古典的作品（例えばC・S・ルイス『ナルニア国物語』（C.S. Lewis *The Chronicles of Narnia*, 1950-1956）を、日本とイギリスの作家がそれぞれの地域や文化の中でどのようにして受容し変容させていったかという、より大きな問題を考察する際の具体例を提供することにもつながるだろう。

2. 『ハリー・ポッター』と『十二国記』について

2.1. 『ハリー・ポッター』シリーズにおけるハリー・ポッター

ハリー・ポッターは父親譲りのくしゃくしゃの黒髪に母親譲りの緑の目を持ち、丸い眼鏡を掛けている。額には稲妻型の傷があり、これは闇の帝王ヴォルデモート (Voldemort) に命を狙われ、呪いを受けた際にできたものである。しかしハリーはその呪いをヴォルデモート自身に跳ね返し、ヴォルデモートの肉体は滅びる。ハリーは歴史上で唯一、闇の帝王の手を逃れた「生き残った男の子 (The Boy Who Lived)」、そしてヴォルデモートを打ち破る力を持つ者であると予言された「選ばれし者 (The Chosen One)」などと呼ばれるようになり、生まれながらにして魔法界で有名人となる。しかし、何故赤ん坊のハリーがヴォルデモートに命を狙われることになったのであろうか。事件のきっかけは、ある人物が告げた予言であった。

1980年に、魔法界を完全支配しようとしていたヴォルデモートに関する、ある予言が告げられる。ホグワーツでの『占い学』教師を志願していたシビル・トレローニー (Sybill Trelawney) がホグズ・ヘッドの2階の旅籠で校長のアルバス・ダンブルドア (Albus Dumbledore) と就職面接をした際、トレローニーは突然何かに憑りつかれたような声で次の引用のように語り出す。

‘The one with the power to vanquish the Dark Lord approaches ... born to those who have thrice defied him, born as the seventh month dies ... and the Dark Lord will mark him as his equal, but he will have power the Dark Lord knows not ... and either must die at the hand of the other for neither can live while the other survives ... the one with the power to vanquish the Dark Lord will be born as the seventh month dies ...’⁴

予言は、ヴォルデモートを永遠に葬り去る唯一の可能性を持つ者が7月の末に、ヴォルデモートに3度抵抗した両親の間に生まれる、と告げている。同年の7月31日にハリー・ジェームズ・ポッター (Harry James Potter) はジェームズ (James) とリリー・ポッター (Lily Potter) 夫妻の第一子として誕生する。だが実は、ハリ

一の他にも7月末に生まれた者がいた。ハリーの同級生、ネビル・ロングボトム (Neville Longbottom) である。彼はフランク (Frank) とアリス・ロングボトム (Alice Longbottom) 夫妻の間に1980年の7月30日に誕生する。また、ハリーの両親もネビルの両親も、ヴォルデモートと3度戦い、彼の手を逃れている。つまり、予言が当てはまる者は魔法界において2人存在しており、ハリーが選ばれることなく、両親も命を落とすことなく家族そろって生活できる可能性もあったのである。しかしヴォルデモートはハリーを選び、ハリーはシリーズ前半では闇の帝王の手を逃れた「生き残った男の子」として、後半では闇の帝王を倒せる唯一の「選ばれし者」として、いつかはヴォルデモートと直接対決をして倒さねばならない、という宿命を背負うことになる。

2.2. 『十二国記』シリーズにおける泰麒

泰麒は鋼のように黒い髪(鬘)を持つ。泰麒は高里要として蓬萊(日本)にいた頃、祖母の美喜が彼の頭を撫でようとした時に、思わずその手を払い除けた。これは泰麒が麒麟⁵という神獣で、額には人間の姿の時は見えないが、麒麟の角を持っており、麒麟は他者に角を触られるのを嫌う獣だからである。しかしそのような事情を知る由もない美喜は(人間として育てられた泰麒も知る由もなかったが)、それ以降は弟の卓^{すぐる}だけを可愛がるようになり、要には何かと理由をつけてきつく当たるようになる。また、要が正座をしてのお辞儀や、土下座をして謝罪をする、などの行為が出来ないのも、美喜から見ると、自分を馬鹿にしているからだ、としか考えられず許せなかった。しかしこれも、麒麟は自分の主上である王に対してしか叩頭^{こうとう}しないためであった。結局のところ、泰麒は家族と共に過ごしていながらも、そこに彼の居場所を見出すことはできなかった。泰麒は何故、そのような境遇に見舞われることになったのか。すべての元凶である悲劇は10年前に起きた。

蓬山^{ほうざん}の捨身木^{しゃしんぼく}に、麒麟の実が1つ付いた。戴国^{たいこく}の麒^き、つまり泰麒の入った実、泰果である。泰麒の親代わりを務める女怪の白油子^{にょかい}をはじめ蓬山に住む女仙^{にょせん}たちが、泰果が熟して麒麟が解^{かえ}る十月後^{とつご}を待ち遠しく思っていた時、大地が揺れて「蝕」という、十二国と蓬萊という別世界とを繋ぐ天変地異が発生する。その際、泰麒の入った実は蝕に飲み込まれ、蓬萊に流されてしまう。それから10年もの間、泰麒は行方知れずになっていた。こうして蝕によって蓬萊に流された泰麒は、高里家に生まれ、高里要^{たかさとかなめ}という人間として過ごすことになったのである。

10年という長い歳月を人間として過ごした泰麒は、十二国には戻れたものの、麒麟としての自覚を持たぬままに戴国の王を選ぶ、という重大な使命を背負ってしまうのであった。

以上のように、ハリーと泰麒は身体的特徴や生まれながらに背負う宿命が類似した主人公であると言えよう。

ハリー・ポッター （『ハリー・ポッター』シリーズ 1997 - 2007）		泰麒＝高里要 （『十二国記』シリーズ 1991 - ）	
作者	J・K・ローリング (1965 -)	作者	小野不由美 (1960 -)
身体的特徴 生い立ち	<ul style="list-style-type: none"> ・黒髪(母親は濃い赤毛、黒髪は父親の遺伝)、痩せた身体、額に稲妻形の傷 ・額の稲妻形の傷 → 'The Boy Who Lived' (「生き残った男の子」)である証 ・ハリーの両親は彼が1歳の時にヴォルデモートによって殺されているため、ハリーは両親のことを知らない ・蛇語を別の言葉と気付かず理解する(呪いを受けた際、ヴォルデモートの魂の一部がハリーの体内に残り、蛇語を理解するヴォルデモートの能力をハリーも知らぬ間に引き継いでいたため) ・17歳で「家」を離れる 	身体的特徴 生い立ち	<ul style="list-style-type: none"> ・黒髪(大抵の麒麟の鬃は金色)、細い身体、額に触られるのを嫌がる(額に神聖な角が生えているため) ・額の角→神獣、麒麟である証 ・生みの親が存在しない(十二国では、生物は母体から誕生するのではなく、捨身木や野木に生る木の実としてもぎ取られて生まれる。高里早苗は蓬菜(日本)において要を産んだが、器となっただけで、本当の母親ではない) ・十二国の言葉を別言語と気付かず理解 ・17歳の年に高里家の保護下を離れる
魔法界の ハリー	<ul style="list-style-type: none"> ・ハリー宛に謎の手紙が届く ・ハリーの周囲で不思議な現象が起こる ・魔法界から迎えが来る(ハグリッド) ・自分が魔法使いであることを知る ・11歳で魔法界へ ・魔法界では「生き残った男の子」として歓迎され、注目された存在 ・常に誰かに護られている(ヴォルデモートの力が強大になるたびに、周囲の者たちが次々と犠牲になっていく) 	十二国 の 泰麒	<ul style="list-style-type: none"> ・高里家の庭で不思議な生き物(麒麟)が目撃される ・十二国から迎えが来る(女怪・白油子) ・10歳で別世界、十二国へ ・自分は人間ではなく「麒麟」という神獣であったと知る ・十二国では吉をもたらす「黒麒麟」として歓迎された存在 ・護られた存在(護る者たちは、泰麒に危害を加える可能性があるかと判断した者に次々と報復し、その度に犠牲者が増えていく)
マグル界の ハリー	<ul style="list-style-type: none"> ・叔母夫婦と従兄に虐げられ、快適とはいえない幼少期を過ごす ・友人と呼べる存在はいない ・ずっと自分の居場所を見出せずにいた ・過酷な幼少期を過ごしてきたため、自分が魔法使いであることなど信じられず、何かの間違いだと思うほど、自信がなかった ・ホグワーツ(魔法界)では様々な才能を発揮し、周囲の者の能力も引き出す存在 →マグル界に戻ると厄介者として邪険に扱われるが、未成年魔法使いは学外で魔法を使うことを禁止されているため、いじめに遭ったとしても対抗できない 	(蓬菜の泰麒) 高里要	<ul style="list-style-type: none"> ・家族とも馴染めず、友人もいない ・居場所を見出せずにいた幼少期 ・育った環境故に自分に自信がなく、周囲の者に申し訳なさを感じている ・十二国では特別な力を持ち、戴国を支える存在として平和を保ち、人の良い一面を引き出す存在 →蓬菜(生国である日本)に戻ると、神隠しに遭った子として気味悪がられ、また帰還後に高里に危害を加えた者は何らかの形で大怪我を負うか、最悪の場合死に至ることがあり、祟りをもたらす存在として排斥される。

2.3. ハリーと泰麒の共通点

現段階で確認できているハリーと泰麒の主な共通点を表にまとめると、次の表の通りである。次項からは、ハリーと泰麒の、共通していながらも大きく異なる描写、物語展開について比較、考察していく。

3. ハリー・ポッターと泰麒の家庭における共通点と差異

この章では、ハリーがマグル（非魔法族）界で、そして泰麒が蓬萊で過ごした家庭について述べていく。どちらも己の能力を知らずに孤独で惨めな年月を過ごし、ハリーは魔法界に、泰麒は十二国に行った際に、自分の本来の居場所を見出す。しかしながら、現実世界に戻る際は、両者ともそれぞれが育った家庭に帰っている。

3.1. ハリーとダーズリー家

ハリーはダーズリー家で、階段下の物置に住まわされ、伯母夫婦や従兄のダドリーから度々虐げられていた。しかし、決して仲良くはなかったが、ダーズリー夫妻は本気でハリーのことを追い出そうとしたこともなければ、ハリーも、ダーズリー家の人々を憎んでいたわけでもなかった。

『ハリー・ポッターと謎のプリンス』（*Harry Potter and the Half-Blood Prince*, 2005）では、ホグワーツ魔法魔術学校のダンブルドア校長が直々にハリーを迎えに来るが、これは校長がダーズリー夫妻に頼んでおくべきことがあったからである。以下の引用は、ダンブルドアがダーズリー夫妻に、今までのハリーに対する扱いに関して言及している場面である。

‘You did not do as I asked. You have never treated Harry as a son.
He has known nothing but neglect and often cruelty at your hands.’⁶

しかし、ダンブルドアがダーズリー夫妻に最も伝えたかった用件は、彼らへの不満ではなく以下の内容であった。

‘The magic I evoked fifteen years ago means that Harry has powerful protection while he can still call this house “home.” However miserable he has been here, however unwelcome, however badly treated, you have at least, grudgingly allowed him his houseroom. This magic will cease to operate the moment that Harry turns seventeen; in other words, at the moment he becomes a man. I ask only this: that you allow Harry to return, once more, to this house, before his seventeenth

birthday, which will ensure that the protection continues until that time.’⁷

この時、ダーズリー夫妻がハリーのことを拒まなかったことで、ハリーは保護の魔法の効果が切れる17歳まで、帰るべき場所を確保することができた。このことから『ハリー・ポッター』シリーズは、J・R・R・トールキン (J.R.R. Tolkien, 1892-1973) の『ホビット——ゆきてかえりし物語』(*The Hobbit, or There and Back Again*, 1937) の主人公、ビルボ・バギンズ (Bilbo Baggins) のように、家を出て冒険を繰り返し広げて成長し、最後には再び家に戻る、という「行きて帰りし物語」⁸の法則に当てはまった物語展開になっていることが分かる。また、7作目『ハリー・ポッターと死の秘宝』(*Harry Potter and the Deathly Hallows*, 2007) の冒頭でハリーはダーズリー家の人々と別れることになるが、今までハリーを邪険に扱っていきめてきたダドリーが、ハリーが自分を吸魂鬼から救ってくれたことに感謝を示す⁹。別れの握手を交わし、ハリーとダドリーは和解する。ちなみに、ダーズリー一家のその後の行方は不明だが、ハリーとダドリーは物語終了後、クリスマスカードを互いに送り合う間柄となっているという¹⁰。

3.2. 泰麒と高里家

蓬萊で高里要として過ごしていた泰麒は、周囲の者に溶け込むことができず、祖母にはいつも叱られ、父親には半ば呆れられ、そのような要の様子を見て母親は秘かに涙を流し、弟にはいつも罪をなすりつけられていた。泰麒にとって、高里家は「家」でありながら、彼自身は溶け込むことができなかった。しかし泰麒は、自分が木の実から生まれた子であるために、蓬萊の家族を喜ばせるような振る舞いができなかつたのか、と納得する。また、自分に本当の両親はいない、という事実も不思議と受け入れられた。そして蓬萊には自分の帰る場所など存在しない、ということも泰麒は悟ったのである。泰麒の中には当初、いつか蓬萊に帰る、という選択肢は存在しなかつたのである。ところが、『黄昏の岸 暁の天』(2001)の冒頭で起きた事件によって、神聖な角を傷つけられた泰麒は無意識の内に「蝕」を起こし、再び蓬萊へと渡ってしまう¹¹。泰麒が蓬萊に戻ったのは、彼に散々辛く当たっていた祖母の葬式の日のことであった。

約言すれば、泰麒にはそもそも親という者が存在しない上に、仮の親である高里家の両親は、泰麒が戻って来ても自分の子とは認めず異質な存在として扱い、最終的には要を切り捨てるのである。

以下は、アニメ版『十二国記』の脚本からの引用である。要のクラス担任をしていた生田という教師が、要を心配するが故に頬を叩いて注意した後、不可解な状況

の交通事故に遭い、死亡する。卒業式まであと少し、という時期であった。要は生田の葬式に参列するが、中学校の生徒たちが要の「祟り」ではないかと噂をし始め、要は耐えられず、焼香も済ませずに会場を飛び出す。

■寺の外

卓が喪服ではない母・早苗さなほを連れてきていて。

早苗「私は行きませんっ、関係ないんだから。

あの子はうちの子じゃない。姿を消したときに

取り替えられちゃったんだから！」

寺から出てきた要、その言葉に遭って……立ち竦すくむ。

早苗を見る要の視線に気付く。卓、思わず早苗をかばうように立つ。

要、クルッと別方向へと去る。¹²

この場面は原作にはない、アニメ版独自の描写となっている。早苗の台詞は原作にも同じようなものが存在するが、原作では、母親が泰麒に対して直接嫌悪感を示す場面は描かれていない。そのような中、アニメ版ではあえて要の目の前で引用のような台詞を母親に言わせている。また、その後の卓の反応からも、高里家の者が要を恐怖、脅威の対象としか捉えていないことが分かる。要と高里家の家族との間にできた溝が埋まることはないのだ、という事実を印象的に描いていると言えよう。

続いて原作、『魔性の子』において、高里家の者たちが全員惨殺されているのが発見された後の場面の引用である。

高里はようやく口を開いた。彼を呆然とさせていたのが突然家族を失ったことではないのだと、その時にようやく悟った。高里は広瀬に聞いたのだ。「やはりぼくのせいなんですか」と。

広瀬には一瞬答えられなかった。

加害者というなら、高里の家族は最も高里にとって加害者だ。報復を受けるなら、高里の母親こそが一番の犠牲者でしかるべきだろう。奴らが見逃すはずがない。今日まで連中が許されていたのは、故あってのことにすぎない。奴らは高里の敵だったが、高里には彼らが必要だった。彼を庇護し、最低限の生活を保障する存在が。そうして、今彼らは必要でなくなった。むろん、広瀬がいるからに違いない。¹³

引用にあるように、要のことを教育実習生の広瀬が高里家の代わりにかくま匿うことが

決定した瞬間、高里家は泰麒が帰るべき場所ではなくなると、泰麒の保護者である白汕子や饗饗に判断され、最終的には父親も母親も、弟までも全員惨殺される。さらには、高里家の邸宅はその後、妻が帰ってくることを恐れた小学生数人による放火で半焼する¹⁴。ハリーとダーズリー家（ダドリー）が最終的には和解という形をとることができたのに対し、泰麒は、心理的にも物理的にも、現実世界での帰る場所を完全に失ってしまったのである。この点で、ハリーと泰麒の家庭環境の描写に大きな差異があると言えよう。しかしながら、両者とも現実世界では、元々育った家庭に戻っていた。やはり、たとえ馴染むことができなくても、そこが彼らにとつての帰るべき場所だったのである。また、ハリーがダーズリー家の者に虐げられてきたにもかかわらず、ダドリーが危険に直面した時には身を挺して救出したように、泰麒もまた、蓬萊では周囲の者、特に家族とは馴染めなかったが、その家族のことを憎むことなく、懐かしく思い、気にかける様子が描かれている¹⁵。

4. ハリーと泰麒の精神的成長の描写の共通点と差異

4.1. 成長するハリー・ポッター

マグルの世界では異端児として扱われてきたハリーであったが、ホグワーツに入学してからは、入学1年目にして例外的に魔法界の競技クィディッチにおけるシーカーというチームの勝敗を握る重要なポジションに任命され、3年時には高度な能力を必要とされる「守護霊呪文」を習得するなど、ハリーは自らの才能を開花させていく。また、マグル界では友だちや味方が1人もいなかったが、ホグワーツ入学後にはロン・ウィーズリー（Ron Weasley）、そしてハーマイオニー・グレンジャー（Hermione Granger）という2人の親友に恵まれ、他にも多くの生徒や教員にも慕われた存在となる。

しかしハリーは、物語が始まった当初は、自分に自信のない少年として描かれていた。

以下は、ホグワーツのから番人のハグリッド（Hagrid）がハリーを迎えに来て、ハリーが魔法使いであることを伝えた時のハリー自身の心境を表した引用である。

Hagrid looked at Harry with warmth and respect blazing in his eyes, but Harry, instead of feeling pleased and proud, felt quite sure there had been a horrible mistake.

A wizard? Him? How could he possibly be? He'd spent his life being clouted by Dudley, and bullied by Aunt Petunia and Uncle Vernon; if he was really a wizard,

why hadn't they been turned into warty toads every time they'd tried to lock him in his cupboard? If he'd once defeated the greatest sorcerer in the world, how come Dudley had always been able to kick him around like a football? ¹⁶

引用からも分かる通り、過酷な幼少期を過ごしたハリーは、自分に自信を持っていない。しかしこの後、ハリーの両親が自分を護るためにヴォルデモートに殺されたこと、両親が自分のために多額の財産を残してくれたことをハグリッドから聞く。両親から愛されていたという事実は、孤児のハリーに大きな自信を与える。例えば、前述の「守護霊呪文」を使う際には、自分が最も幸福な瞬間を思い浮かべる必要があるのだが、呪文を完全に習得した時、ハリーが思い浮かべたのは両親の姿であった。また、第4作目『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(*Harry Potter and the Goblet of Fire*, 2000)において、完全復活を遂げたヴォルデモートとの直接対決で苦戦を強いられてもハリーが耐え抜くことができたのは、「直前呪文」¹⁷によってヴォルデモートの杖から現れたハリーの両親の木霊が彼を励ましたからである。実体はなくとも両親が見守ってくれているという実感があったからこそ、ハリーは挫けることなくヴォルデモートに立ち向かえたのである。その後も苦境に立たされるハリーにとって最大の心の支えはやはり両親の存在であった。第7作『ハリー・ポッターと死の秘宝』(*Harry Potter and the Deathly Hallows*, 2007)において、己の中に潜むヴォルデモートの魂の一部を消滅させるために自らの命を犠牲にする覚悟を決めた際、ハリーは「死の秘宝」の1つである「蘇りの石」を用いて両親たちの霊を呼び出す¹⁸。最期の瞬間までずっと傍にいてくれる、という両親の言葉に安心し、ハリーは自らの死と向き合うことができたのである。

以上のことから、物語全般を通してハリーを支え成長させているもの、それは「親」の存在であり、親から大切に愛されていたという思い出がハリーを精神的に支え、自信を与えて成長させていたと考えられる。親から愛されているという実感の有無は、物語の展開を『十二国記』とは大きく異なるものにしていく。

4.2. 弱気な泰麒、唯一の理解者

物語が展開していくと共に、ハリーが精神的にもたくましく成長していったのに対し、『十二国記』シリーズにおける泰麒は、自分自身のことを否定的に捉えており、周囲の者に対しても常に申し訳ない、という気持ちを抱いている。

田中雅史は「小野不由美作品における分離の象徴化 (1) 自分自身の王であるということ——『十二国記』シリーズ『月の影 影の海』」において、「主人公が外部の世界やその媒介者である他者（特に家族）に心理的に束縛され、自分自身の行動

の自由を持ってないという状況を、小野不由美はしばしば描いている。「十二国記」シリーズでは陽子、高里（戴麒）など、『屍鬼』では静信、敏夫などが代表的だが、それ以外の登場人物にもよくみられる」¹⁹と述べているが、『風の海 迷宮の岸』冒頭の泰麒は特に、己の行動に絶対の自信がない。田中が言及しているように、泰麒は高里家の人々によって心理的な束縛、抑圧を受けていたからである。幼少期からの精神的抑圧の影響は、十二国に来てからの泰麒の台詞にも表れている。

「汕子が迎えに来てくれて、蓬山に来て、ぼくの本当の家は蓬蘆宮なんだと聞いて、それでだったんだな、って。……でも、蓬蘆宮でもやっぱり同じなんです。誰もぼくを叱ったり、ぼくのせいで泣いたりしないけれど、やっぱりぼくは誰も喜ばせてあげられない。時々、自分が本当はキリンじゃないんじゃないかと思います。もしもキリンじゃなかったら、ぼくは蓬蘆宮にいちゃいけない。うちにいちゃ、いけなかったのと同じに」²⁰

しかし、蓬萊では自分の居場所を見出せなかった泰麒だが、女怪の白汕子によって連れてこられた女仙の住む蓬山では、戴国の麒麟としての帰還を喜ばれた上に、黒い鬘を持った吉事をもたらず黒麒としてさらに歓迎されている。このことは最終的には泰麒にとって精神的な支えとなり、彼は物語の後半で、並の麒麟では折伏できないとされる饕餮という伝説の妖魔を折伏²¹して指令²²に下すことにも成功する。それが黒麒麟ならでは能力なのか、それとも泰麒自身の持つ才能なのかは明らかではないが、兎にも角にも尋常ではない力を発揮する。

蓬山での生活を通して、泰麒はようやく自分に自信を持つことができるようになったかに思われた。しかし、その矢先に事件が起きて泰麒は蓬萊に戻るようになってしまい、全てはふりだしに戻るところか深刻化する。蓬萊に戻ってきた泰麒は事件のショックで、麒麟の角だけでなく十二国で過ごしていた間の記憶もなくしていた。そのため、せっかく手に入れた自信も、十二国では多くの者に大切に愛されていたという記憶もすべて失われてしまったのである。さらには蓬萊に戻ってから高里要として再び生活するようになってからは、「神隠し」に遭った子ども、として周囲の者に気味悪がられ、要に危害を加える者は怪我をするか、最悪の場合死亡するようになり、高里要は「祟る」と噂され始める。次第に、元々存在した高里家の他の家族との溝はさらに深まっていき、唯一味方的存在になり得た母親さえも、要のことを「取り替え子というのなんです、あの子は。姿を消した時に取り換えられてしまったんです」²³と、忌み嫌うようになる。

泰麒のことを思いやっの言動だろうと、担任も同級生も、彼と深く干渉しよう

とした者は容赦なく報復された。こうして泰麒は他者と関わろうとすることをやめ、自分がこの世からいなくなれば全て平和に解決するのではないかと、思い詰めるようになるほど、蓬萊で孤立した存在となる²⁴。しかしながら、マグル界では理解者を得られなかったハリーに対し、泰麒には蓬萊において唯一、彼に理解を示そうとした者がいた。第3節で前述した、教育実習生の広瀬である。広瀬は幼少期に臨死体験をし、3日間ほど意識不明になった経験があった²⁵。意識を取り戻した後は、自分の親からは良くも悪くも「お前は死にかけた子だから」と言われ続ける。次第に広瀬は生死をさまよっていた時に見た気がする光景こそ、自分の本来の居場所だったのではないかと、という思いを抱きながら日々を過ごすようになる。そのような中で高里要（泰麒）という神隠しに遭ったとされる不思議な生徒に出会い、広瀬は泰麒も自分と同じように、「故国を亡くして、この地上に桎梏で繋ぎ止め」られた、「故国をただ語り偲ぶことしかできない異邦人のわずか一人の同胞」²⁶なのだ、と感情移入する。広瀬が泰麒にとって唯一の理解者的存在であったと同時に、泰麒もまた、高瀬にとって唯一の理解者だったのである。このことは、ハリーと泰麒の大きな相違点の一つとして指摘すべき点であろう。

『ハリー・ポッター』シリーズと『十二国記』シリーズにおいて、ハリーと泰麒は冒頭でこそ、2人とも自分に自信のない主人公として描かれていたが、物語全体を通して見受けられる大きな相違点は、主人公の家族や友人との精神的な繋がりの有無であり、この差異が、ハリーと泰麒が共通点を多く持ちながらも異なる人物像として捉えられる所以となっていると考えられる。おそらくは、この点こそ、両シリーズが比較され論じられることが少ない要因の1つであろう。

5. まとめと今後の課題

以上のように、本論ではJ・K・ローリングの『ハリー・ポッター』シリーズにおける主人公、ハリー・ポッターと小野不由美の『十二国記』シリーズの主要人物である泰麒、それぞれの主人公像を比較しながら、ハリーと泰麒が多くの共通点を持ちながらも、2つの作品同士が類似していることに関して言及がなされてこなかった理由について検討した。ハリーと泰麒のそれぞれの人物描写や育った家庭環境に関する描かれ方に決定的な違いが存在するためだと考えられるが、国も異なれば接点もない作者同士の作品の主人公像にこれだけの類似性があるのは、より細かく考察すべき点であろう。今後の課題として、まず作者同士の接点が見受けられない中でローリングと小野の2人を繋ぐ共通項、C・S・ルイスの『ナルニア国物語』の影響はより精密に検討すべきである。さらに、2つの作品が同じ1990年代に登

場している点にも注目し、特に日本に焦点を当てて当時の時代背景や、同じく90年代前後の作品の影響も視野に入れ、時代のどういった流れが、『ハリー・ポッター』シリーズや『十二国記』シリーズの受容につながったのか、その所以を考察していきたい。

注

- 1 「ハリー・ポッターとは」『Pottermania』<http://www.pottermania.jp/Books/HarryPotter.htm> (2017年9月20日 最終閲覧)
- 2 「累計780万部突破！驚異のファンタジーシリーズ『十二国記』の魅力」『ダ・ヴィンチニュース』2012年8月7日 http://www.excite.co.jp/News/column_g/20120807/Davinci_000725.html (2017年9月20日 最終閲覧)
- 3 高橋準『ファンタジーとジェンダー』青弓社、2004年、203頁。
- 4 J.K. Rowling. *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury Publishing, 2003, p. 741. 「闇の帝王を打ち破る力を持った者が近づいている……七つの月が死ぬとき、帝王に三度抗った者たちに生まれる……そして闇の帝王は、その者を自分に比肩する者として印すであろう。しかし彼は、闇の帝王の知らぬ力を持つであろう……一方が他方の手にかかって死なねばならぬ。なんとすれば、一方が生きるかぎり、他方は生きられぬ……闇の帝王を打ち破る力を持った者が、七つ目の月が死ぬときに生まれるであろう……。」(松岡佑子訳『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団 下』静山社、2004年、652頁。)
- 5 古代中国の伝説の靈獣。伝説上では、徳の高い人物が現れるとき、その予兆として姿を現すとされている。十二国の世界においては天意の象徴となる神獣であり、普段は人の姿をしている。慈悲深く、争いごとを嫌い、特に血の穢れを恐れる。天意に従って王を選び、王の命令には必ず従う。(會川昇『アニメ脚本集 風の子 迷宮の岸 / 書簡』講談社、2003年、4頁。)
- 6 J.K. Rowling. *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury Publishing, 2005, p. 57. 「そなたたちはわしが頼んだようにはせなんだ。ハリーを息子として遇したことはなかった。ハリーはただ無視され、そなたたちの手で度々残酷に扱われていた」(松岡佑子訳『ハリー・ポッターと謎のプリンス』静山社、2006年、82頁。)
- 7 Ibid., pp. 57-58. 「わしが十五年前にかけた魔法は、この家をハリーが家庭と呼べるうちは、ハリーに強力な保護を与えるというものじゃった。ハリーがこの家でどんなに惨めだったにしても、どんなに疎まれ、どんなにひどい仕打ちを受けていたにしても、そなたたちは、しぶしぶではあったが、少なくともハリーに居場所を与えた。この魔法は、ハリーが十七歳になった時に効き目を失うであろうつまり、ハリーが一人前の男になった瞬間

- 間にじゃ。わしは一つだけ願ひする。ハリーが十七歳の誕生日を迎える前に、もう一度ハリーがこの家に戻ることを許してほしい。そうすれば、その時が来るまでは、護りは確かに継続するのじゃ」(同上、83頁。)
- 8 「この場所とは異なる向こう側の世界に行って、帰ってくる」という物語構造。「行きて帰るし物語」はJ.R.R. Tolkien (1892-1973) の *The Hobbit, or There and Back Again* (山本史郎訳『ホビット——ゆきてかえりし物語』、1937) が初出である。
- 9 J.K. Rowling. *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury Publishing, 2007, pp. 39-40.
- 10 “J.K. Rowling Talks Marriage, Writing and More at Open Book Tour Stop in New York City.” *The Leaky-Cauldron.org*. <http://www.the-leaky-cauldron.org/2007/10/19/j-k-rowling-talks-marriage-writing-and-more-at-open-book-tour-stop-in-new-york-city/> (2017年7月19日 最終閲覧)
- 11 小野不由美『黄昏の岸 暁の天』講談社、2001年、14-18頁。
- 12 會川昇『アニメ脚本集 風の家 迷宮の岸 / 書簡』講談社、2003年、219-220頁。
- 13 小野不由美『魔性の子』新潮社、1991年、309-310頁。
- 14 同上、392頁。
- 15 小野不由美『風の家 迷宮の岸』講談社、1993年、143-144頁。「思い出してみると、古い家の廊下は迷路よりも楽しい遊び場だった気がした。庭は迷宮のどの広場よりもきれいな場所だった気がする。女仙に囲まれているよりも、学校の校庭でどのグループの仲間にも入れず、ぼつんと同級生の遊びを見ていたときの方が、ずっと楽しかった気がする。一女仙の誰よりも、汕子よりも家族のほうが優しくなった気がしてしまうのだ。今頃は夕ご飯だろうか。母と祖母と弟で、食卓を囲んでいるのだろうか。父親は何時に帰ってくるだろう。早くに帰ってきて大きな背中を流させてくれるだろうか。思い出せば何もかもが切なく恋しかった。庭の紫陽花は咲いたろうか。祖母は傘を出したろうか。喧嘩した母は一人で風呂場に行くのだろうか。弟は夜中に一人で手水に行っているのだろうか。一少しでも自分のことを思い出してくれているだろうか。」
- 16 J.K. Rowling. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury Publishing, 1997, p. 67. 「ハグリッドは優しさと敬意に輝く眼差しでハリーを見た。ハリーは喜ぶ気にも、誇る気にもなれなかった。むしろ、とんでもない間違いだという思いの方が強かった。魔法使いだって？この僕が？そんなことがあり得るだろうか。ダドリーに殴られ、パーノンおじさんとベチュニアおばさんにいじめられてきたんだもの。もし本当に魔法使いなら、物置に閉じ込められそうになるたびに、どうして連中をいばいぼヒキガエルに変えられなかったんだろう？昔、世界一強い魔法使いをやっつけたなら、どうしてダドリ

- 一なんか、おもしろがって僕をサッカーボールのように蹴っていじめることができるんだろう？」(松岡佑子訳『ハリー・ポッターと賢者の石』静山社、1999年、89頁。)
- 17 「直前呪文(Priori Incantatem)」は、杖がそれまでにかけた呪文を、直前にかけたものから順々に吐き出させる魔法。本来ならば呪文を唱えることで発動させるが、ハリーとヴォルデモートの杖は同じ不死鳥の羽が杖芯に使われた兄弟杖であったため、2人の放った呪文がぶつかった際、強制的に直前呪文が発動し、ヴォルデモートの杖が殺めた犠牲者のゴースト(木霊)が、ハリーの両親を含め順々に現れた。(寺島久美子『ハリー・ポッター大辞典Ⅱ——1巻から7巻を読むために』原書房、2008年、322頁。)
- 18 Rowling, *Harry Potter and the Deathly Hallows*, pp. 559-564.
- 19 田中雅史「小野不由美作品における分離の象徴化(1) 自分自身の王であるということ——「十二国記」シリーズ『月の影 影の海』」『甲南大学紀要 文学編』第165号、2015年、3-9頁。 <http://doi.org/10.14990/00001558>
- 20 小野『風の海 迷宮の岸』139頁。
- 21 折伏とは、「麒麟が妖魔を指令とするために、その妖魔と契約すること」であり、「契約した妖魔は麒麟の死後、その死体を食べ、麒麟の力を手に入れる。」(會川、4頁。)
- 22 指令とは「麒麟と契約し、麒麟に仕える妖魔」のことである。(同上。)
- 23 小野『魔性の子』156頁。
- 24 同上、394-396頁。
- 25 同上、102頁。
- 26 同上、428-429頁。

参考文献

一次資料

- Lewis, C.S. *The Chronicles of Narnia*. New York: Harper Collins Publishers, 2004.
- Rowling, J.K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury Publishing, 1997.
- , *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. London: Bloomsbury Publishing, 1998.
- , *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. London: Bloomsbury Publishing, 1999.
- , *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury Publishing, 2000.
- , *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury Publishing, 2003.
- , *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury Publishing, 2005.
- , *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury Publishing, 2007.
- 會川昇『アニメ脚本集 風の海 迷宮の岸/書簡』講談社、2003年
- 小野不由美『魔性の子』新潮社、1991年

-
- 『風の家 迷宮の岸』講談社、1993年
—『黄昏の岸 暁の天』講談社、2001年
講談社 X 文庫特別編集『十二国記公式アニメガイド KC デラックス』講談社、2004年
桃原郷『風の家 迷宮の岸 一章—二章』講談社、2003年
—『風の家 迷宮の岸 三章—四章』講談社、2003年
—『風の家 迷宮の岸 五章—終章』講談社、2003年
トールキン, J・R・R 著、山本史郎訳『ホビット——ゆきてかえりし物語』原書房、1997年
ローリング, J・K 著、松岡佑子訳『ハリー・ポッターと賢者の石』静山社、1999年
—『ハリー・ポッターと秘密の部屋』静山社、2000年
—『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』静山社、2001年
—『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』静山社、2002年
—『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』静山社、2004年
—『ハリー・ポッターと謎のプリンス』静山社、2006年
—『ハリー・ポッターと死の秘宝』静山社、2007年

二次資料

- “J.K. Rowling Talks Marriage, Writing and More at Open Book Tour Stop in New York City.” *The Leaky-Cauldron.org*. <http://www.the-leaky-cauldron.org/2007/10/19/j-k-rowling-talks-marriage-writing-and-more-at-open-book-tour-stop-in-new-york-city/> (2017年7月19日 最終閲覧)
- 安藤聡『『ハリー・ポッター』シリーズに見る英国ファンタジーの伝統』『大妻比較文化——大妻女子大学比較文化学部紀要』第13号、2012年、115-127頁
- 大杉重男『『十二国記』の政治学』『ユリイカ 特集中国幻想綺譚』青土社、2003年、102-107頁
- 小原一馬『『十二国記』の社会倫理学(1) その道德教育への応用可能性』『宇都宮大学教育学部研究紀要 第1部』第66号、2016年、61-76頁
- 木梨由利『戦いの終り——「ハリー・ポッター」物語にみる「愛」の意味』『金沢学院大学紀要 文学・美術・社会学編』第6号、2008年、31-41頁
- 高橋準『ファンタジーとジェンダー』青弓社、2004年
- 田中雅史『小野不由美作品における分離の象徴化(1) 自分自身の王であるということ——『十二国記』シリーズ『月の影 影の海』』『甲南大学紀要 文学編』第165号、2015年、3-9頁
<http://doi.org/10.14990/00001558>
- 寺島久美子『ハリー・ポッター大辞典Ⅱ——1巻から7巻を読むために』原書房、2008年
「ハリー・ポッターとは」『Pottermania』<http://www.pottermania.jp/Books/HarryPotter.htm>
(2017年9月20日 最終閲覧)
- 「累計780万部突破！驚異のファンタジーシリーズ『十二国記』の魅力」『ダ・ヴィンチニュース』2012年8月7日 http://www.excite.co.jp/News/column_g/20120807/Davinci_000725.html (2017年9月20日 最終閲覧)